ヒノキ　Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl
ヒノキ科　Cupressaceae

1.　利用可能部位
木材：木材を柾目に薄く剥いでテープ状、あるいは割り裂いて籤状にして編組素材とする。
樹皮：薄く細長く剥いでテープ状にして編組素材・縄素材とする。
根の木材：細く割り裂いて籤状にして編組素材とする。
気根：そのまま、編組素材あるいは縄素材とする。

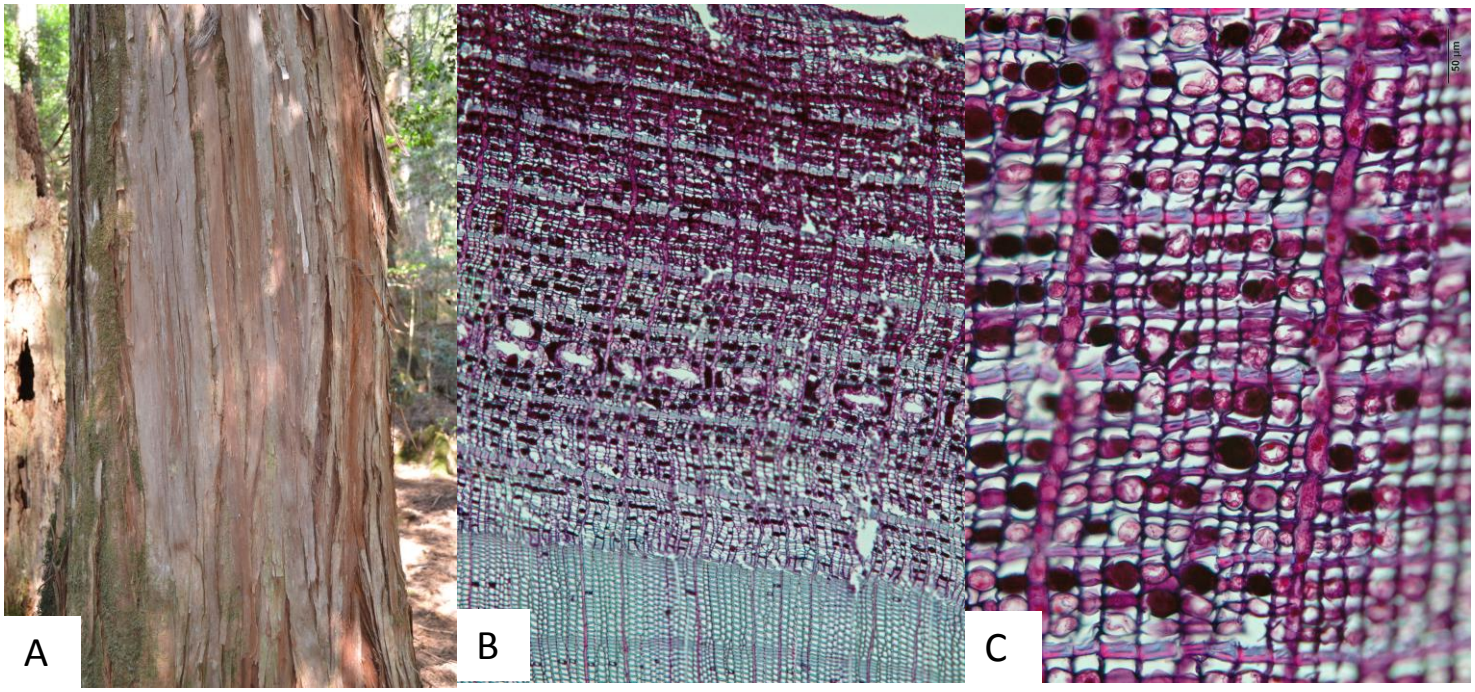
2.　組織形態
〔木材〕森林総合研究所の木材データベース「日本産木材データベース」（http://f030091.ffpri.affrc.go.jp/JWDB/home.php）を参照のこと。
〔樹皮〕樹皮の横断面で見ると層状構造が見える（B、C）。この層構造は厚壁で矩形の繊維細胞の層、篩細胞の層、柔細胞の層、篩細胞の層、繊維細胞の層の繰り返しである（C）。繊維細胞の大きさおよび壁の厚さには各層毎に変異があり、扁平で放射径が小さく壁の薄い細胞からなる層から、断面が方形に近く壁の厚い細胞からなる層まである。この層群を放射方向に区切って単列の放射組織があり、背は高くない。
〔根の木材〕
（工事中）
〔気根〕
（工事中）

3.　利用例
木材：木材を剥いでテープ状とし、桧笠、編みカゴなどが現在も生産されている。
樹皮：神社等の屋根葺き材とするほか、薄く細長く剥いでテープ状にして編組素材・縄素材とする。「木曽式伐木運材図会」に杣人の道具として檜皮を編んだ背負籠と山刀の手籠の絵がある（所三男「木曽式伐木運材図会」徳川林政史研究所, 1977 年）
根の木材：知られていない
気根：知られていない

4.　遺跡出土遺物：
〔木材〕鳥取市高住井手添遺跡（縄文時代晩期）のカゴ編物（鳥取県教育文化財団「高住井手添遺跡」第 2 分冊（本文編 2）、鳥取県教育委員会 2015）など、多数。
〔樹皮〕「ヒノキ」と種を特定したものはない。「ヒノキ科樹皮」とされるものは青森市三内丸山遺跡の縄文時代前期の小型カゴ編物（いわゆる縄文ポシェット）（青森県教育委員会「三内丸山遺跡 42」、2015）などがある。
根の木材：ヒノキと樹種が特定されたものは知られていない。
気根：（工事中）

図の説明

A:ヒノキの樹皮、B: ヒノキの樹皮の横断面。層状構造があり、樹皮内に傷害樹脂道の層がある。 C:樹皮横断面の拡大。断面矩形の繊維細胞の層-細胞内容物のない断面長方形で潰れた篩細胞の層-丸く膨らんでよく染色されている柔細胞の層--細胞内容物のない断面長方形で潰れた篩細胞の層-断面矩形の繊維細胞の層、の繰り返しで構成されているのが分かる。


A
B
C
50 µm